Un jour

青森市男女共同参画情報紙

—性別・世代・時代を超えて—

アンジュールはフランス語で「ある日」という意味。一人ひとりの「ある日」を紡いでいきたいという願いを込めた情報紙です。

アンジュール

平成 28 年度カダールフェスタ 市民活動企画展オープニング

「いつも人生に写真があった ～沢田サタ 91 歳　教一・ベトナム・平和を語る～」

平成 29 年 1 月 21 日㈯カダールフェスタオープニングイベントとして、青森市出身のピュリツァー賞受賞写真家・沢田教一さんの妻・沢田サタさん（弘前市在住）、ベトナムからの青森中央学院大学留学生ファム タイン フオンさんとグエン ザ バオさんのトークイベントが青森市男女共同参画プラザ「カダール」で 135 名が参加し賑やかに開催されました。

当時の写真を見ながら、夫・教一さんとの出会いからサタさんご自身の最近の暮らし、そして平和を訴え続けることの大切さなどを語ってくださいました。留学生たちは、小さい頃から祖母に、「隣人とコミュニケーションをとることが『世界が平和』になるためには必要」と聞いて育ち、将来について、「日本に住み働き、お店を持ちたい」などと、夢や希望を語ってくれました。

サタさんはベトナムへは何度か足を運んでおり、その時撮影した写真について、「戦争が終わってベトナムへ行き、ファインダーを覗いた時、その平和な子どもたちの様子に、教一の気持ちでシャッターを押していた」とお話してくださいました。

いつも前向きに物事を捉えるサタさんの生き方に、会場に来ていた観客は、元気とパワーをもらいました。

「男女共同参画都市」青森宣言

私は私を大切に思うのと同じ重さで
あなたを大切に思う

性別を超え
世代を超え
時代を超え
人と協調し　人を信頼できる
誇り高い人間でありたい

すべての人の自立と平等をめざして
青森はここに「男女共同参画都市」を宣言します

平成 8 年 10 月 22 日　青森市

特　集

固定的性別役割分担意識にとらわれない生き方・仕事選びについて、青森市でいきいきと活躍されている方々をロールモデルとしてご紹介します。

青森市で長年活動されている女性団体「青森市女性会議連絡会」についてご紹介します。

男女共同参画都市あおもり

2017.3　No.50

「がんばれ」 —50 号に寄せて—

アンジュール創刊時メンバー
白井　壽美枝さん

—プロフィール—
- 早稲田大学卒業
- 青森市男女共同参画情報紙「アンジュール」元編集アドバイザー
- 企画集団プティジュール代表
- 「日本女性会議 2002 あおもり」実行委員長
- 前青森市男女共同参画プラザ/前青森市働く女性の家館長
- NPO 法人あおもり男女共同参画をすすめる会顧問
- 平成 27 年度青森県いきいき男女共同参画社会づくり表彰功労賞受賞
- 平成 28 年度青森市表彰受賞

『アンジュール』が 50 号という節目を迎えた。ちょうど「男女共同参画都市」青森宣言から 20 年目の年度の終わりに。平成 8 年度からの年 3 回の発行が平成 16 年度から年 2 回になり、8 ページ建てが平成 19 年度から 4 ページ建てになった(日本女性会議開催の平成 14 年度は 16 ページ建てだった)。『アンジュール』にも歴史ありである。

『アンジュール』は、県内初の女性情報紙だった。創刊号の巻頭には、「次世代に何を残せるのか」とある。「女性たちの数多の熱き思いをのせて…」ともある。読み返すと、青森版『青鞜』※だったと言えなくもない。おそらく、それほどに熱い思いでの創刊だったのだろう。現在よりもはるかに強かった女性差別を思い起こす。平成 11 年に男女共同参画社会基本法が施行され、『アンジュール』も平成 15 年度から「男女共同参画情報紙」となった。「女性たちの数多の願い～」ではなく、「全ての人の～」に変わったのである。

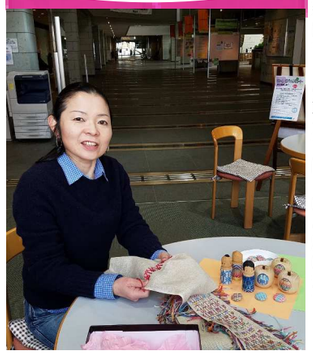
創刊 5 周年の年には、それまでの編集スタッフ(当時は公募の 2 年任期)で「アンジュールクラブ」を結成し、市役所 1 階の市民サロンに展示コーナーを開いた。一人一つの研究テーマは、働き方事情、国連女性の地位委員会、「男らしい」ってアンケート結果、「平等」に関しての意識の違い、高校の教科書に見る性と生殖、「やせる」と健康、子どもがいないのは不幸なこと?などなど。あれから 15 年経った今も、現代的課題と言えるだろう。

創刊 10 周年には、特集で 10 年を振り返った(29 号)。女性とメディア、女性と介護、セクハラ・DV、個人システムの時代、この 4 つの再考察だった。『アンジュール』が取り上げた時点では、まだ DV 防止法や介護保険法も作られていなかった。保険証は一世帯に 1 枚だった。こうしてみると、世の中は変わっている。

だれが変えたか。それは人々の声であってほしい。そして、声を上げるための気づきを人々に渡し、共に変革を進めていくのが情報紙だろう。『『アンジュール』よ、がんばれ」と期待したい。カダールにはバックナンバーがそろっているので、ぜひ 50 号までを読み返していただきたいと思う。

※青鞜…女流文芸雑誌。明治 44 年創刊、大正 5 年廃刊。青鞜社の機関誌。平塚らいてうが編集、のち伊藤野枝が引き継いだ。創刊号巻頭文の「元始、女性は太陽であった」が有名。

輝きびと



根っから青森が好き。青森を外に発信したい」

『BREST』代表
津軽こぎん刺し作家　西川　千秋さん

青森の商品を発信する仕事で起業し、また津軽こぎん刺し作家としても県内外各地で活躍中の西川さん。

青森市で広告宣伝のためのプランニングの仕事をしています。特に農家さんとのお仕事が多く、このトマトジュースを、どうしたら売れるようになるか?と購入者が手に取りたくなるパッケージを、農家さんと一緒に考えて商品化するなどの仕事をしています。

仕事で心がけていることは、デザイナーと顧客の間に自分が入り、仕事以外の話もしながら、顧客が本当に伝えたいことを形にしていき、無駄と思える中から個性を引き出すようにしていることだそうです。

仕事をしていてよかったと思うことは、「人との出会い」と話します。起業してからたくさんの人に助けてもらい、いつも『この人はどんな人だろう』と人に会うのが楽しみだといいます。

若い頃は失敗すると落ち込んでいたそうですが、今は失敗したから、こっちの方法を見つけられたと思えるようになったと話します。

これから起業する人に伝えたいことは、無駄なことは一つもないということ。また、一人でできることには限界があり、助けてほしい』と人に言えることが大切。自分を応援してくれる人を増やしてほしい。」だそうです。

また、津軽こぎん刺し作家でもある西川さんが惹かれるのは、青森の春夏秋冬、海や山、四季折々の自然の色といった青森にしかない色。津軽こぎん刺しは一色使いが多いなか、そういった青森の様々な色の糸をたくさん使った作品を作っているそうです。なぜなら、周囲の人が、自分の作品に求めているのは、多くの色の糸を使った作品だと感じたからだそうです。

仕事とプライベートの両立の秘訣はというと、私は仕事もプライベートも一緒。気分転換で食事をしている時も、『この色いいなあ』と次の仕事や作品のことを考えたりしています。たぶん根っから青森が好きで、青森を外に発信するために役立つヒントを日々見つけることが楽しくて、それが気分転換になっていると思います。」と素敵な笑顔で語ってくれました。

様々な働き方がある中で、男女問わず起業という働き方を選択する人が増えていますが、起業家として、またこぎん刺し作家として、大好きな青森で活躍している西川さんのような輝きびとがこの青森にもっと増えてほしいと思います。

＜発行＞

青森市市民生活部人権男女共同参画課
〒030-8555　青森市中央 1-22-5
☎　017(734)2296　FAX　017(734)5765
＜編集スタッフ＞
山口睦子・田中真紀（NPO 法人あおもり男女共同参画をすすめる会）、堀内美穂（NPO 法人ウィメンズネット青森）、千代谷直美（企画集団プティジュール）

●カダール託児室●

青森市男女共同参画プラザ「カダール」での催事や青森市民図書館の利用のほか、中心市街地での買い物や通院などの時にも安心して利用できる施設です。

【託児時間】　9:00～21:30
（毎月第 2 水曜日を除く）
【対象】　1 歳 6 か月～就学前
【料金】　1 時間 600 円（最長 3 時間）
【お問合せ】　☎017（776）8800
※前日までに要予約

・・・青森市の男女共同参画拠点施設・・・

＊青森市男女共同参画プラザ「カダール」
（青森市新町 1-3-7 アウガ 5・6Ｆ）
【開館時間】　9：00～22：00
【休館日】　毎月第 2 水曜日
【電話】　017（776）8800
【FAX】　017（776）8828

＊青森市働く女性の家「アコール」
（青森市勝田 1-1-2）
【開館時間】　9：00～22：00
【休館日】　毎月第 2 日曜日
【電話/FAX】　017（723）1700

※転載ご希望の場合はご連絡ください。

私たちの身近にいるロールモデルのご紹介

※ロールモデル…将来像を描いたり、自分のキャリア形成を考える際に参考とするモデルのこと。

特集

「伝統文化の中にも女性の視点を」

廣田神社　権禰宜（ごんねぎ）　**田川　育美**さん

女性の神主さん（神職）は青森市で２人。育美さんと先代の宮司の妻である育美さんのお母様です。現在、弟の伊吹さんが宮司としてお父様の後を継いでいます。

全国的にみると女性の神主さんは全体のごくわずか。少子化などの影響で後継者が少ないなど、女性の神主さんも少しずつ増加傾向にはあります。歴史的背景から見ると女性は神事において非常に重要な役割を担ってきましたが、近代に入ると男性社会へと変容し、神主は男性のみとされたことから男性が多い職業であるといいます。

東京で保育士をしていた育美さんが廣田神社で神職につき４年目。弟さんが父親の後継者となり、自分も家族として力になりたいという思いが強かったそうです。

地鎮祭などの祈祷では建設現場にいるほとんどが男性、安産祈願や、初宮詣などでは女性や子ども達と接する事が多いそうです。最初はご祈祷や参拝される方の多くが「神職＝男性というイメージ」を持っていたようで、驚かれることもありました。

「今は男性だから、女性だからとこれまでの固定的な考え方でなく、それぞれの立場で役割を果たし、協力し支え合うことが大切なことなのでは」と田川さん。また、「女性ならではの視点で伝統や文化を地域の方に伝えていきたい」と昨年『舞姫会』を立ち上げ、子ども達に舞やお作法などを通じて日本文化を伝える活動や、宮司による年中行事のおはなしとお花のアレンジ体験ができる講座などを企画し、地域とのつながりを広げています。

「これからも日々感謝する気持ちを一人ひとりに伝えていきたい」と目を輝かせている田川さんでした。

「地域の人たちの役に立ちたい」

青森市健康福祉部高齢者支援課　保健師　**塚本　周平**さん

幼いころから病院に通うことが多かった塚本さんは、医師や看護師と触れる機会が多く、将来は医療系の仕事に就きたいと青森県立保健大学へ進学。保健師はもともと『保健婦』と呼ばれ女性の仕事とされていましたが、1993 年の法改正で男性も保健師をめざせるようになり名称も『保健師』と統一され、年々保健師を目指す男性が増加しています。現在、男性の保健師は全体の１割程度です。学生のころから女性が多い環境で勉強してきましたが、男性ならではの切り口があると信じて働いているそうです。

「保健師は、医師や看護師のように治療する立場と違い、地域の人とかかわる機会が多く、生の声を聴くことができ、人対人のつながりをとても身近で感じる」と塚本さんは言います。

現在みなさんが住み慣れた地域で元気に暮らし続けることができるよう、介護予防に取り組んでおり、町会や老人クラブなどへ出向き様々な指導を通して、地域の人たちの役に立ちたいという思いも込めて支援をしているそうです。

「スノーボードが好きで青森を離れたくない！」と、仕事も趣味も充実している塚本さん。「みなさんの元気な暮らしを支えるため、これからも努力します！」と力強く話していました。

これから、保健師を目指している男性の方に、「女性が多い職場と思われがちですが、男性・女性を意識せず、自分の目指す保健師のために、一緒に取り組むことが大事で、また、そのことを楽しむことが大切!!」とメッセージをくれました。

「目標は現代の名工」

斎藤畳内装株式会社　畳製作１級技能士　**須藤　ゆかり**さん

昨年、青森県女性初の畳製作１級技能士（国家資格）となった須藤さん。女性の１級技能士は東北でも２人しかいないそうです。

工業高校の定時制に通っていた 15 歳から４年間、今の職場で手伝いなどをしていましたが、畳職人の仕事をみていて自分もやりたい！と思い、卒業後畳職人として働き 28 歳で２級技能検定に合格。その後約６年、１級技能検定試験を受けるまでの練習が本当にきつかったといいます。合格するには５時間以内に手縫いで仕上げる必要があったそうです。通常の仕事が終わってから、練習する日が続いたという須藤さんは職人歴 21 年。１級技能士になってからは以前よりも責任を感じるようになったといいます。注文に対し出来ないとは言えない、一方でまだまだ可能性を求めて高度な技術を必要とする神社仏閣などの特殊な畳も作れる“できないものが無いと言える畳職人”になりたいという夢も広がったと語ります。

職人では紅一点。女性ということで力仕事では男性との差を感じることもありますが、その分気遣いや持ち前の根性で自分のこだわりを追及してきました。職人としての畳製作はもちろん、畳を使った空間のトータルコーディネートを提案し、「お客様が大好きな部屋」をつくっていきたい。プライベートで居酒屋や和菓子屋などに行っても、畳や壁など和のインテリアが気になってしょうがないと話します。

「信念を持ってやっていれば自ずと目標が見えてくる。目標に向かって挑戦し努力して頑張っている人には周囲の人も応援したくなる」。いつも有言実行、「やらないで後悔するよりもやって後悔した方がいい。」と語ります。作業場にも貼っている好きな言葉は、

－意識が変われば行動が変わる
行動が変われば結果が変わる－

目標は実績を積んで、『現代の名工』になること。「変わろうとしないと何もはじまらない。考えているだけじゃダメ！常に向上心を持って、思ったら今やらなきゃ！」と、話しているだけで希望や元気をもらえる活き活きとした素敵な女性でした。

長年活動している青森市女性団体のご紹介

●青森市女性会議連絡会●　会長　秋田谷　洋子　さん

女性会議連絡会は、それぞれ異なる活動目的を持つ１１の女性団体（下記構成団体）で構成され、ネットワークを構築しています。女性団体相互の連絡、協調、つながりを強化して、女性の地位向上と福祉の増進を目的に、豊かな地域づくりを目指して３０数年にわたり取り組んでいます。

主な活動として、社会情勢の変化や地域の課題など理解を深めるため、会員勉強会として、平成 27 年度は「マイナンバー制度とは？」、今年度は「子どもの貧困と学習支援」などの講演会を開催し、知識の向上を図っているほか、市及び県などの取組に積極的に協力、参加しています。

また、青森市と函館市が青函トンネル開通を契機に、平成元年ツインシティ提携の盟約を締結して文化・スポーツ・観光・経済などの幅広い交流を図ってきた中で、平成７年に青森市女性会議連絡会並びに函館市女性会議は青函ツイン提携し、両団体が相互に訪問しあい研修会等において情報交換を続けるなど長年にわたり女性団体の交流を推進し、青函交流の発展に努めています。

青函交流会

【構成団体】
青森市母子寡婦福祉会、椿山会、新日本婦人の会青森支部、青森市婦人団体連絡協議会、青森市消費者の会、青森地区更生保護女性会、Ｉ女性会議青森支部、青森生活学校連絡会、青森市交通安全母の会、東青母親連絡会、日本ＢＰＷ青森アソシエーツ

●青森市婦人団体連絡協議会●　会長　白戸　きぬゑ　さん

青森市婦人団体連絡協議会は、青森市の婦人団体を会員に昭和２９年に結成されました。その活動は、長きにわたり、ねぶた祭りの清掃奉仕や緑化の推進を通じた「きれいなまちづくり」に向けた運動をはじめ、施設を慰問するなど高齢者や障がい者の支援活動、また、青少年健全育成のための夜間見回りなど、地域に根ざした様々な活動を展開し、文化の向上や健康の増進などに努めています。

また、もっとも身近な暮らしの場である地域において、各町会の婦人会の皆様がコミュニケーションを図りながら舞踊や歌謡などを練習し、その成果を発表する場である「会員親善芸能大会」をリンクステーション青森で開催しております。ステージでのその活き活きした姿と出来ばえに、毎年多くの観客から大きな拍手や声援が送られています。

清掃活動

相　談　窓　口

●青森市配偶者暴力相談支援センター●

支援を必要とするDV被害相談者からの電話相談及び電話予約による面接相談を行っています。
あなたの大切な人が困っている時には、こちらの専用ﾀﾞｲﾔﾙをご紹介ください。ひとりで悩まず、まずはお電話を。
【時間】8:30～17:00(土日祝日･年末年始を除く)
【電話】017(734)5318

●女性の悩み相談　カダール相談室●

自分自身の生き方や家族のことでの相談、配偶者やパートナーからの暴力の悩みなど、ひとりで悩まず、ご相談ください。女性に限らず、男性もご利用ください。
【相談受付時間】9:00～21:00(休館日を除く)
【電話】017(776)8858
※あらかじめ相談日時を確認してください。

●性的マイノリティにじいろ電話相談●

パートナーとの関係、家族や友人との関係、職場や学校のことなど、性的マイノリティに関する問題全般について、お気軽にご相談ください。当事者の方だけでなく、ご家族、ご友人等からのご相談にも応じます。
【相談受付時間】9:00～21:00(毎週火曜日)
【電話】017-776-8803